



双塔

カトリック新潟教会

2015年 8月
No. 327

歴史から学ぶ (二)

— 待つ釣り —

主任司祭 ラウル・バラデス

私は釣りの世界と縁のないまま育ちましたが、学生時代に無理矢理引っ張られて、友だちと一緒に何度か川へ釣りに行きました。ある日、仲間に「魚釣りのどこが楽しいのか」と聞いてみました。すると意外な答えが返ってきました。「待つことが楽しいんだよ！」私は「なーんだ、つまらない」と当時思ったものでした。

今回の巻頭言に関連する文献を読みながら、ふと、その魚釣りの話を思い出しました。前月の月刊「双塔」にアンリ・アルムブリュステルの手紙を紹介しましたが、今回は Felix Evrard (1844-1919) (エヴラール) 神父のある手紙について共に考えたいと思います。

エヴラール神父は1867年に来日して、函館のアルムブリュステル神父のもとで日本語の勉強を始めました。彼は箱館戦争を目撃し、彼の報告文はよく知られています。函館の任務を経て、1871年の春に新潟に来ることになりました。二十七歳の若さで新しい宣教地を任されました。

当時、新潟はまだ外国人が殆どいなかった時代でした。エヴラール師は二人の信徒と一緒に宿を探しましたが、行く先々で断られました。米屋の渡辺喜兵衛の二階を家賃六ヶ月分前払いすることでやっと借りることができた次第と他の事柄は「新潟県キリスト教会史」に掲載されています。1874年の秋、目に見える成果が一つもないまま新潟を去って行きました。

新潟に滞在していた間は「待つ釣り」の長い三年間でした。魚が引掛かって来るのを待つばかり、この状態はある人にとっては楽しい時間かもしれませんが、他の人にとっては精神的な拷問になるでしょう。しかし、エヴラール師には期待していなかった魚がかかったようでした。布教できない状態の中、十六時間続けて勉強したこともあったそうです。この努力の結果、新潟で学んだ日本語は後に幅広く、特に外交の現場で役に立ったのです。エヴラール師の名が知られているのは原敬との関係のおかげです。原敬がフランス語を学習しながらエヴラールとフォリー神父に日本語を教えていたことは有名な話です。他の活動ができず、勉強しかできないエヴラール師は、1871年10月に新潟の状況を報告する手紙を出しました。その内容は非常に興味深いです。

「最近、熱狂的に流行しているのは新聞そのものです。日本のガゼットはわずか数ヶ月の間に数多く咲きだした。国民の知性を照らすためには新聞という手段しかないと一般的に思われています。この町(新潟)の市長は刑務所の囚人にも新聞を読ませるようにと条令をもって命じたほどです。この条令のおかげで市長は高く評価され先駆者として認められるようになりました。今まで新聞がなかったのでこのようなことはあまり聞いたことがなかったそうです。しかし、この流行はすべていいことに繋がるとは思えません。このタブロイドは不祥事とゴシップばかり報道しています。時々、知性を照らすよりも暗闇に落とし入れるかのように見えます。」

言語を一生懸命に勉強し、魚(洗礼を望む人)がかかるのを待ちながら、若いエヴラール神父は意義ある3年間を新潟で過ごしたと言えるでしょう。

周りの状況をしっかり見極めて、当時の新しいメディアのいいところを評価し、そうでない部分をはっきりと明言し、時のはやりに流されないで、深く根をおろした木のような生き方を見せてくださいました。現実にとしっかりと立って、希望を持って待つことにはそれなりの隠れた楽しみがあることを示してくださいました。



そよかせ便り



■ 年間第 14 主日 ----- 7 月 5 日 (日) -----

7 月第 1 週の英語ミサは、休暇中のナジ神父様の代わりに、長岡教会のロレンソ神父様に司式をお願いしました。お説教は、女子サッカー W 杯決勝戦を目前に、『Nadeshiko JAPAN』という親しみやすい切り口で始まり、英語と日本語を交えてのお話。ミサの後は、さっそく写真撮影の嵐。ラウル神父様も飛び入りされて、みんなでパシャ！

カトリック新潟教会 月刊「双塔」 毎月 1 回 最終日曜日発行 編集・発行 / カトリック新潟教会 教会運営委員会 広報部
〒951-8106 新潟市中央区東大畑通一番町 656 TEL : 025-222-5024 FAX : 025-222-5054 <http://www.niigatacathedral.org>

